

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：14202

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23730518

研究課題名（和文） 盲ろう通訳介助者の労働と健康に関する実態調査

研究課題名（英文） A study on work load and health among interpreters/guides for Deafblind people.

研究代表者

中村 賢治（NAKAMURA KENJI）

滋賀医科大学・医学部・非常勤講師

研究者番号：00541624

研究成果の概要（和文）：全国の盲ろう通訳・介助員を対象にした質問紙研究により、通訳・介助員の筋骨格系の症状訴え率が高いことが明らかとなった。通訳・介助活動の派遣頻度が高いと、痛みの訴え率も高くなっていた。通訳方法によっても、痛み訴え率が異なっていた。通訳・介助員の作業関連運動器障害の予防のためには、派遣頻度の管理が重要と考えられた。

研究成果の概要（英文）：The questionnaire study revealed that interpreters/guides for deaf-blind people in Japan had much musculoskeletal symptoms. Those who carried out interpreter/guides activities more often suffered from musculoskeletal pain. Prevalence of musculoskeletal pain was also different in their interpreting way to communicate. We concluded that management on interpreter/guide activities was important to prevent work-related musculoskeletal disorders.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：障害者福祉・作業関連運動器障害・盲ろう者

1. 研究開始当初の背景

わが国における視覚聴覚重複障害者（以下、盲ろう者）数はおよそ 22,000 人と推計されている（全国盲ろう者協会）。盲ろう者にとって、コミュニケーション支援や移動介助は人権保障に必要不可欠である。盲ろう者のコミュニケーション方法には、接近手話や触手話、指点字、ブリスト、手書き文字など様々な手段がある。こうした盲ろう者のコミュニケーション保障を担う「通訳・介助員」と呼ばれる人たちは、全国の各自治体が障害者団体や盲ろう者の会に委託して開催する盲ろう者向け通訳者養成研修会等で養成され、一定の通訳介助技術を習得した者が、盲ろう者の要請に応じて派遣されている。

一方、ろう者に対するコミュニケーション保障の手段である手話通訳は、上肢を中空に保持しながら反復動作を行う作業であるため、頸肩腕障害などの作業関連性筋骨格系障害に罹患する手話通訳者が多い。触手話や指点字なども、手話通訳と同じく上肢を中空保持しながら反復動作を行う作業であり、頸肩腕障害に罹患するリスクが高い作業と考えられる。触手話では、通訳・介助員の手の上に盲ろう者の手を置いて作業を行うため、通常の手話に比べて頸肩腕部への負荷がより大きいと考えられる。また、指点字も、盲ろう者の横で通訳をする場合、体幹をひねりながら横に重心をずらした不良姿勢で行うため、負荷が大きい作業と考えられる。しか

し、触手話や指点字などの通訳作業における身体的および精神的な作業負荷、通訳・介助員の健康状態についての調査や研究は、これまでにみあたらない。

2. 研究の目的

通訳・介助作業の労働負担と、通訳・介助員の健康状態について明らかにすることで、通訳・介助員が健康で円滑に盲ろう者を支援できるような方策を検討する基礎資料とする。

3. 研究の方法

対象者は、各都道府県にある通訳・介助員派遣事業所に登録している通訳・介助員で、およそ月1回以上の派遣実績のある者とした。最終的に、全国で940名の通訳・介助員が選ばれた。

方法は、無記名式の質問紙調査とした。2012年5月に、各派遣事業所を通じて対象者に調査票を郵送し、直接返送させた。締め切りは7月末とした。統計学的検定にはSPSS ver. 17を用い、群間の比較には χ^2 検定を行った。有意水準は5%とした。本研究は、滋賀医大の倫理委員会で承認を得た(承認番号24-2)。

4. 研究成果

(1) 結果

① 基本属性

575名から回答があった(回収率61.2%)。女性91.1%、男性8.9%、平均年齢は56.2才(±9.8)であった。最年少は23才、最高齢は80才で、60才以上の者が40.9%を占めていた。通訳・介助員に登録してからの年数は平均6.6年(±4.4)で、登録後5年未満の者が45.3%を占めていた。通訳・介助員以外に仕事をしている者は71.4%で、手話通訳、介護職、事務職がトップ3であった。子供がいないと答えた者は20.0%で、子供がいると答えた80.0%のうち、子供が高校生以上と答えた者が90.0%であった。介護が必要な家族は、同居していると答えた者が13.8%、別居でいる者が10.3%でした。聴覚に障害のある者は12.3%、視覚障害のある者は0.7%、その他の障害のある者は0.7%であった。

通訳・介助員以外の活動について尋ねたところ、手話通訳活動をしている者は42.1%、要約筆記は7.3%、ガイドヘルパーは9.7%、サークル・ボランティア活動は62.8%であった。通訳・介助員のコーディネーターをしていると答えた者は11.0%であった。

② 通訳活動について

まずは、通訳・介助活動の頻度と、1回あたりの時間を表1に示した。ここで公費派遣とは、派遣事業所に盲ろう者

から依頼があり、派遣事業所から通訳・介助員に派遣要請をした場合を指し、個人派遣とは派遣事業所を介さずに盲ろう者から直接通訳・介助員に依頼があった場合を指すこととした。月8回以上と答えた者は13.2%、最多の者は月24回、次に多かった者は月21回であった。派遣された1回あたりの平均時間の最短は30分、平均の最長は9時間、派遣1回あたりでは最長19時間という回答があった。

表1 通訳・介助活動の頻度と時間

	派遣頻度(回/月)					
	公費派遣		個人派遣		合計	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
平均的な月	3.1	2.7	2.9	2.8	4.0	3.5
多い月	5.4	3.6	4.7	4.1		

	派遣1回あたりの時間(時間/回)					
	公費派遣		個人派遣		平均	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
平均的な月	3.3	1.7	3.2	1.8	3.2	1.6
長いとき	6.3	2.4	6.3	3.1		

③ 通訳・介助員の健康状態

身体部位別自覚症状のうち、痛みへの訴え率について表2に示した。ここでは、男女差は認めなかったため、全体の結果を示した。

表2 身体部位別痛み訴え率 (n = 575)

		いつもある			時々ある			めったにない		
		左	右	合計	左	右	合計	左	右	合計
肩	左	12.8%	14.3%	13.5%	29.0%	30.6%	29.8%	58.2%	55.1%	56.7%
	右	14.3%	11.4%	12.8%	30.6%	24.5%	27.5%	55.1%	64.1%	58.8%
頸	左	9.5%	11.4%	10.4%	25.5%	24.5%	25.0%	65.0%	64.1%	65.6%
	右	11.4%	4.1%	7.7%	24.5%	4.8%	14.6%	64.1%	71.9%	63.5%
背	左	4.1%	4.1%	4.1%	22.8%	4.8%	10.5%	73.1%	71.9%	72.4%
	右	4.8%	4.3%	4.5%	23.4%	7.1%	14.8%	71.9%	70.7%	71.4%
腕	左	4.3%	4.1%	4.2%	16.8%	4.1%	10.4%	78.9%	84.4%	80.4%
	右	7.1%	4.9%	6.0%	22.2%	4.9%	13.5%	70.7%	81.1%	75.4%
手指	左	4.1%	4.1%	4.1%	11.5%	4.1%	9.7%	84.4%	81.1%	82.8%
	右	4.9%	10.0%	7.4%	14.0%	11.3%	12.6%	81.1%	48.9%	70.5%
腰	左	10.0%	11.3%	10.6%	39.2%	11.3%	25.4%	50.9%	48.9%	50.1%
	右	11.3%	10.0%	10.6%	39.8%	11.3%	25.4%	48.9%	48.9%	49.4%

1990年に調査され、痛みへの訴え率が高いと問

題になった専任手話通訳者の結果と比べても、頸肩腕部の痛み訴え率は高い傾向にあった。

④通訳・介助活動と健康の関連

派遣頻度が月2回以下を低頻度群(n=241)、月2回を越え、4回以下を中頻度群(n=158)、月4回を越える者を高頻度群(n=153)と、3群に分けた。そして、年齢調整した通訳・介助した日の疲れと頸肩腕部の痛み訴え率を比較した。高頻度群ほど、症状の訴え率が高い傾向にあった。

表 3-b 通訳頻度と痛み訴え率

		いつもある	時々ある	めったにない
頸*	低頻度	6.7%	19.8%	73.5%
	中頻度	4.9%	22.6%	72.5%
	高頻度	15.9%	32.3%	51.8%
肩**	低頻度	7.6%	24.1%	68.3%
	中頻度	7.5%	27.4%	65.0%
	高頻度	16.8%	35.1%	48.1%
腕** *	低頻度	1.2%	12.6%	86.2%
	中頻度	4.0%	16.5%	79.5%
	高頻度	5.5%	19.4%	75.1%

*p = 0.001 **p < 0.001 ***p = 0.053

次に通訳方法別の痛み訴え率を比較する。最も多く使う通訳方法の上位5位までの群について、年齢調整をした痛み訴え率を算出した。そして、痛みを感じることを「いつもある」と「時々ある」を合わせた率を、図1に示した。通訳方法によって、痛みの訴え率が異なっている可能性が示唆された。

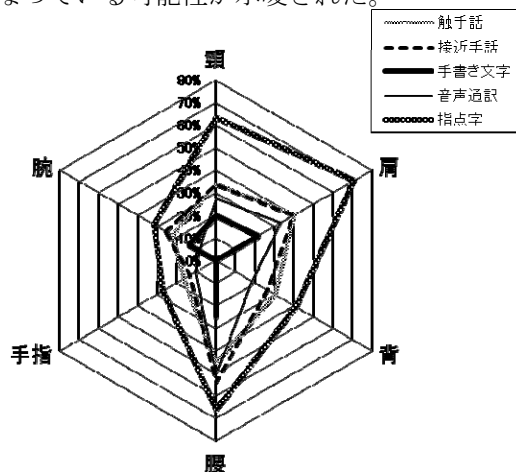


図1 通訳方法別年齢調整痛み訴え率(いつも-時々)

(2)考察

通訳・介助員の年齢は、60才以上が40%

以上であり、就労している者としては高齢であると考えられた。しかし、年齢に比べて登録年数は短く、一定の年齢に達してから通訳の勉強や活動をはじめたという背景があると思われた。

通訳・介助員の痛み訴え率は高かった。したがって、対策を急ぐべきだと考えた。

派遣頻度が高いと、症状の訴え率も高くなっている傾向にあった。そのため、派遣頻度の管理が対策として重要だと考えた。しかし、平均で週1回の派遣頻度であり、その他の日の過ごし方、通訳・介助活動以外の仕事が、筋骨格系の訴え率に影響している可能性も十分に考えられた。しかし、本研究では、通訳・介助活動以外の日については調査しておらず、今後の課題であると考えた。また、通訳方法によっても痛みの訴え率が異なっており、通訳方法別の管理が必要だと考えた。

【まとめと今後の課題】

本研究から、通訳・介助員の痛み訴え率は高いと考えられた。盲ろう者のコミュニケーション保障のためにも、派遣頻度の管理が必要と考えられた。また、通訳方法別の管理について検討する必要があると考えられた。

本研究では、通訳・介助活動以外の負荷について調査していない。このことを考慮に入れた対策について検討することは、今後の課題と考えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① Kitahara T, Nakamura K, Taoda K, Sigeta H, Hirata M : A Case of Cervico-brachial Disorder due to Tactile Interpretation for Deaf-blind Persons. Journal of Occupational Health, 54 (6) : 469-472, 2012 (査読有)

[学会発表] (計5件)

- ① 中村賢治、盲ろう者通訳介助の労働と健康に関するパイロット調査、日本産業衛生学会、2012年5月31日、名古屋国際会議場
- ② 中村賢治、盲ろう通訳・介助員の労働負荷と健康に関する調査、日本産業衛生学会、2013年5月16日、ひめぎんホール

〔その他〕
ホームページ等

島崎 郁司、住尾 健太郎、中野 隆、矢倉 愛未、「盲ろう者とその通訳介助者に対する社会医学的検討」2011年度滋賀医科大学社会医学フィールド実習報告書

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 賢治 (NAKAMURA KENJI)
滋賀医科大学・医学部・非常勤講師
研究者番号：00541624

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：